

序文



多くの既往歴や不定愁訴をもつことが多い成人と異なり，小児科を受診する患者は，明らかな症状や所見をもつことが多いです．しかし我々小児科医が子どもの患者を診察する時，「病気までのレベルではない」，「病気とまでは言えない所見や症状」のことも多々あります．昔，何かの折に，症状や所見がそろっている最後に診る医者診断があたるのは当然で，それまでの微微候の時に診た医者診断を責めてはいけない，と教わったことがあります．微微候のなかに重大な疾患が隠されていることもあれば，軽微な徴候や症状で終わることもあります．もし専門医に紹介しないで適切に処理できれば，「あそこの先生は頼りになる」という評価につながるかもしれません．また，逆に，微微候から重大な疾患を疑って，専門医に紹介すれば，「あそこの先生は，重い病気をはやく見つけてくれた」と，これまた高い評価につながるかもしれません．微微候，微症状の診断は，「微」であるが故に難しさを秘めていて，「微妙」でもあります．

また，子どもの微微候，微症状のなかには，育児相談や乳幼児健診の際に保護者から相談されることが多いものも多々あります．その際に，適確な診断や，適切な助言ができれば，これも高い評価につながることでしょう．実際に，小児科医の実臨床に必須な知識，診断技術でもあります．

このように，子どもの微微候，微症状は実に奥が深いものがあります．子どもの微微候，微症状と向きあえることは小児科医の醍醐味でもありましょう．本特集を一読していただいて，先生方の知識を今一度新鮮なものにしていただき，実臨床で生かしていただきますよう，また，その後は座右においていただいて折に触れて参考にしていただきますようお願いいたします．

2021年9月

「小児科」編集者一同